

大嫌いな伯爵令息と偽装婚約したら
毎晩溺愛されて逃げ出せません

犬猿の仲の幼馴染は嘘の婚約者

目次

大嫌いな伯爵令息と偽装婚約したら毎晩溺愛され
て逃げ出せません
犬猿の仲の幼馴染は嘘の婚約者

5

番外編 前日譚 ズギルフォードSides

261

大嫌いな伯爵令息と偽装婚約したら
毎晩溺愛されて逃げ出せません

犬猿の仲の幼馴染は嘘の婚約者

プロローグ

数年前、学生時代最後のバレンタイン。
私ルイズは、ずっと一緒に過ごしてきた幼馴染のギルフォード・グリフィスへ思い切って告白をした。

卒業後は彼の叔母であるマダム・モリスンが経営する菓子店で菓子職人^{パティシエ}として修業する予定で、ギルフォードは海外の大学に進学が決まっていた。

幼い頃からずっと一緒に過ごしてきた彼と、ついに離れ離れになってしまう。

貴族の淑女から告白するなど、はしたないと思われるかもしれない。それでも、このまま何も言わずに離れるのは耐えられなかった。そう思って、意を決して自分の気持ちを伝えてみたのだ。

返事はすぐにはもらえず、生きた心地のしないまま一か月が過ぎた頃、彼に呼び出された場所では衝撃を受けることになる。

目の前に立つ美青年ギルフォードは、周囲に取り巻きたちを従え、ふんぞり返って得意げな表情を浮かべていた。

「ルイズ・フォード。お前みたいな菓子作りに明け暮れる侯爵令嬢じゃあ、誰も嫁にもらっては

くれないだろうな」

ギルフォードの父親は財界に大きな影響を持つ大富豪で、母親は古くから続く伯爵家のご令嬢だ。彼は不遜な態度のまま、豪華な箱を私に向かって差し出してきた。

「ほら、お返しだ」

取り巻きたちからニヤニヤした視線を向けられ、私の身体は小刻みに震えた。

わざわざ人前でこんな仕打ちをするなんて……告白を断るにしても、せめて誰もいない場所でしてほしかった……

拳をきつく握りしめ、爪が肌に食い込む。唇を強く噛まなければ、ショックで歯の根が合わないほどに震えてしまいそうだった。

「ギル、それが返事なの？」

「ああ」

父親譲りの甘い顔立ち。獰猛な獣のようなサファイアブルーの瞳を眦^{まが}め、口元を歪ませ、彼は意地の悪い笑みを浮かべてアッシュブロンドの髪をかき上げた。

「だが、仕方がないから、この俺がお前をもらってやっても……むしろお前の家に養子に入って、グリフィスの姓を捨てて、ギルフォード・フォードになっても構わない」

ギルフォードが何か喋っていたが、ショックのあまり何も頭に入っていない。

彼の話最後まで聞いたら心が壊れてしまいそうで、これ以上何も聞きたくなかった。

けれども、ちゃんと事実を受け入れないといけない。本当は顔を見るのも怖かったけれど、勇氣

を出して前を向いた。

すると、相変わらず偉そうな態度のギルフォードが鼻を鳴らした。

「ルイズ、とにかくお前は俺専属の菓子職人になれば良い！」

彼は豪華な黒い箱を私に差し出したまま、そう言った。

専属の菓子職人……？　まるで、都合のいい使用人と宣告されたように思えた。

恋人になれるかもなんて、甘い夢だったのね。対等な関係の幼馴染だと思っていたのは私だけだったんだ……

受け入れがたい事実だけが胸に突き刺さり、そのまま儚く消えてしまいたかったが、私は消え入りそうな声を振り絞り、彼の申し出を拒否するために、震えながら口を開いた。

「……箱の中身が何か知らないけれど、いらないわ」

気持ちとは裏腹に、想像以上に低い声が出てしまった。

「なん……だと？」

ギルフォードの声が上ずった。

彼は傲慢で口も悪いが、本当は誰にでも優しい人だった。

幼い頃、一緒に孤児院の手伝いに行った時も、彼は子どもたちに慕われていた。学園でも人望があり、文武両道。私にだけは意地悪な言い方をするけれど、それも仲が良いからだと思えた。しかし、大勢の前で私を辱めるような今の態度は、ただの嫌がらせにしか思えない。

私は彼をキッと睨みつけ、もう一度拳を握りしめた。

「そのプレゼント、家のお金で買ったものでしょう？」

「だったら……何の問題がある？」

一瞬たじろいだ彼に、私は思ってもいない言葉をぶつけてしまった。

「お父様の稼いだお金で贈り物だなんて、格好悪いわ！　私はちゃんと自立している男性が好きなの！　別にギルのことなんて、これっぽっちも好きじゃないんだから！」

ギルフォードのサファイアブルーの瞳が揺れるのに背を向け、私は逃げるように屋敷に向けて駆け出した。

その出来事は瞬く間に学校中に広まり、結局彼との気まずい関係が変わることはなく卒業を迎えた。

彼はそのまま海外に旅立ち、別れの言葉さえ交わすことはなかった。

そうして、数年の月日が流れた。

ギルフォードは実家のグリフィス家とは別に事業を立ち上げ、家族の力に頼らずに自力で事業を成功させ、財を成したという。

ついでに女性関係も派手になったという噂も流れてきたが、羽振りの良い男性には付き物なのかもしれない。

だけど、そんな話を耳にするたびに、胸がチクチク痛んだ。ギルフォードのことは、甘酸っぱい思い出というよりも苦々しい記憶が勝る。

一方の私は、菓子職人の道を邁進していた。仕事は楽しく順調で、おかげであんなに辛かった失恋の痛みも、いつの間にか彼方へと追いやられていた。

そうして充実した日々を過ごし、気づけば結婚適齢期の二十歳を過ぎていた。すると今度は、私の将来を心配した親戚たちから、堰を切ったようにお見合い話が持ち込まれるようになったのだ。

この数年間、仕事楽しくて異性に気持ちを向ける余裕がなかった。

それ以上に、初恋の相手であるギルフォードよりも好意を抱ける男性が現れなかったのだ。だというのに、お見合いをしつこく勧められ続け、いよいようんざりしてしまった。

ある朝、ついに我慢できなくなった私は、父であるフォード侯爵に嘘を吐いてしまう。

「お父様、私には好きな人がいるの。その彼と愛を育んでいるから、お見合いの話は全て断って！」
その場しのぎの嘘だった。しかしその日の夕方、帰宅した私を出迎えたのは神妙な顔をして私を待ち構える父の姿だった。

「ルイズ、待っていたよ」

父親に促されるまま応接間に連れて行かれて、私はソファに座らされた。

父も反対側のソファに同じように座った後、私のことを問い詰めはじめた。

「ルイズ、今朝の話だけけれど……」

「今朝？」

「好きな人がいるって言うていただろう？」

父が何を言っているのか分からず、私はキョトンと首を傾げてしまったが、ハツとなって慌てて手で口を覆い隠した。

叔母様からのお見合い話を断りたくて、好きな人がいるって嘘を吐いてしまったんだわ……！

父の深刻な表情に罪悪感が湧き、背中に冷や汗が流れはじめる。

「いったい相手は誰なんだい？ 事と次第では相手に容赦はしないけれど」

話し方は普段通りとても丁寧なものだったけれど、父の笑顔には静かな怒りが浮かんでいた。

「ええっと、お父様……彼は……とても誠実な男性で、お父様が心配するようなことはありませんから」

思わず声が裏返った。嘘だとバレたかもしれない。

心配しながら父の表情を見たが、目が全く笑っていないかった。

困ったわね……私の背を冷や汗が流れ落ちる。

父に嘘を吐かなければ良かった。親戚たちをどうにかしたいから、好きな人がいると伝えてほしいと、正直に頼めば良かっただけなのに……余計な嘘を吐いたせいで、面倒な事態に陥った。

「ルイズ、聞いているのかい？ 本当にしているのなら、今すぐ相手を連れて来れるかな？」

にこやかな表情の父のリップを持つ手が震えていて、心中穏やかではないことが分かる。

さて、どうしようかしら？

その時、扉が開き、母親が部屋に入ってきた。

「あら、ルイズ、恋人ができたの？」

深刻な父とは対照的に、なぜか母ははしゃいでいた。

「ええっと、あの……」

今さら嘘だと言い出せる空気ではない。すぐに白状すれば良かったと後悔が込み上げる。いっそ、今からでも正直に伝えてしまおうかと、言葉が喉まで出かかった。

濃厚な両親のことだ、嘘だと分かれれば許してくれるはずだ。

しかしながら、それでは過保護な祖父や叔母たちからのお見合いの猛攻が止むことはないだろう。これ以上、私のことでお父様が親戚たちから責められるのは耐えられない。

貴婦人の身でありながら仕事をしているお母様の育て方が悪かったとか、そんな風に言ってくる親族だっているんだから……

絶対にここは嘘を吐き通すのよ。

グッと拳を握り直して決意を固める。

なんとしても、この場を乗り切ってみせる。例えば、誰かに婚約者役をお願いしてみようかしら？

貯金はたくさんあるし、誰かに頼むなりして……！

必死に思考を巡らせていた、その時だった。

リンリンリンと、まるで助け舟が来たかのようなタイミングで屋敷の呼び鈴が鳴った。

「私、お客様に対応してくるわ！」

「ルイーズ！ 待ちなさい！ 使用人に任せればいいから！」

九死に一生とはこのことだ。

制止する父の叫びを無視して、慌てて応接間を飛び出した。

回廊を駆け抜けて玄関を開けると、秋の訪れを感じるひんやりとした心地よい風が吹いてくる。ドレスの裾がまとわりついてくるのも忘れて、庭を駆けた。

門扉前に訪問者の姿が見える。

「お待ちせいたしました、どちら様でしょうか？」

もうすっかり夕暮れ時だ。

陽が沈んでいるせいで相手の顔がはっきりとは見えないが、どうやら金髪碧眼の長身の青年のようだ。

相手がこちらを振り向くと、ふわりと甘やかな香りが漂い、鼻腔を突いてくる。

手を伸ばせば届くほどの距離まで相手が近づいてきた。

「貴族のご令嬢が直々にお迎えか。お転婆は変わらないみたいだな、ルイーズ」
聞き覚えのある低い声に、サアツと血の気が引いた。

心臓がバクバクとおかしな音を立てて、まるで時が止まってしまったかのようだ。

まさか……だけど、私が彼の声を聞き間違えるはずはない。

薄暗さに慣れていなかった目が次第に慣れてきて、相手の顔がしっかりと判別できるようになってくる。

目の前に立っていたのは——数年前、大勢の取り巻きの前で私をこっぴどく振り、人生最悪の屈

辱を味わわせてくれたあの彼だった。

……これは夢なの？ 思わず何度か目をこすってしまったが、どうやら現実のようだ。

晩夏の風が、彼の艶やかな金髪をサラサラとなびかせる。相変わらず、この世のものとは思えないほどの美形だが、学生時代に比べると精悍さが増していた。長身瘦躯の彼はなぜか正装に身を包んでいて、しかもなぜか大輪の深紅の薔薇の花束を腕に抱えている。

そして、いかにも意地悪そうにサファイアブルーの瞳を眇めてこちらを眺めていた。

「ギル……な、なんで？」

そう、門の前に立っていたのは幼馴染のギルフォード。

なぜ海外で事業を立ち上げたはずの彼が、こんなところにいるのだろうか？

私の身体は小動物のように縮こまったままだ。

「なんで、ギルが私の屋敷に!？」

「ルイズ、お前に話があつて……」

「ルイズ！」

何か言いかけたギルフォードの言葉にかぶせるように、父の声が遠くから聞こえてくる。

私はギョツと身体をこわばらせる。

「どうしよう、お父様に追いつかれてしまう」

「はあ？ どうして、親父さんに追いかけられているんだよ」

ギルフォードが嘆息した。溜息を吐く姿も様になるが、今はそれどころではない。

どうしよう……焦りがどんどん募っていく中、ハッと気づく。

そういえば、誰かに恋人役を頼んではどうかと先ほどまで考えていたのだった。

父の気配はどんどん近づいてきている。

昔、こっぴどく振られたギルにだけは頼りたくない。だけど、ここはもう覚悟を決めるしかない。

藁にも縋る思いで、私は文字通り彼の逞しい腕に縋ってこう告げた。

「ギル、一生の頼みがあるのよ！ 口裏を合わせてちょうだい！ 貴方が私のことを嫌いなのは分かっている。だけど、どうか！」

「……俺がお前を嫌い？」

怪訝な表情を浮かべるギルフォードの顔を見て少しだけ胸が痛んだけれど、とにかく今はこの場をどうにかしのぎたい。

「何でも言うことを聞くから！ お願い、私を助けて！」

すると、ギルフォードがピクリと反応した。

「何でもと言った言葉に嘘はないか？」

「ええ」

「分かっているのか？ 俺に頼みごとだなんて、高くつくぞ」

色香のある声音が耳元で聞こえてソクリとするが、覚悟を決めるしかない。私はコクンと頷いた。ちようど父が追いついてくる。

「あれ？ ギルフォード君じゃないか、久しぶりだね。お父さんとは別に事業を立ち上げて、大成

功を収めているらしいじゃないか」

父もまた、ギルフォードとは旧知の仲だ。

私の存在など忘れたかのように、二人はにこやかに談笑を始めた。長身の父と並んでも、高身長
のギルフォードは引けを取らない。

ギルは本当に口裏を合わせてくれるのかしら？

不安でソワソワしていたその時。談笑中の父がハッとしたように私の方を振り返った。

「もしかして、ルイズの恋人というのはギルフォード君のことなのかい？」

私はわたたと両手を動かし、必死に話をでっちあげはじめた。

「そ、そうなのよ、お、お父様！ 今朝話していた恋人というのは、ギルのことなの！」

あまりの緊張に、何度か舌を噛みそうになった。

ちらりと私を見下ろしてきたギルフォードに向かって、私は視線で訴える。

——お願い、ギル！ 口裏を合わせて……！

父を騙すのは心苦しいが、私はまだ仕事を続けたい。

だけど、そのせいで両親が親戚から責められるのも、貴族の堅苦しいしきたりのアレコレに縛ら
れるのも、もうごめんだった。

「二人は交際中だったの？ ならば、なぜもつと早くに教えてくれなかったんだ。彼は長い間海外
にいたはずだが、いったいいつからそんな関係に？ まさか、学生時代からずっと？」

父から放たれるひんやりとした空気に思わずドキッとす。私の発言を疑っているのは明らか

だった。

さすがに海外に行っていたギルと交際中だなんて、無理がありすぎたかしら？

当のギルフォードといえば、不敵に微笑んだまま、肯定も否定もせず黙り込んでいた。

ああ、やっぱりダメね。もうこうなったら、諦めて誰かとお見合いをするしかないんだわ……

少しだけ、ほんの少しだけ、ギルフォードが話を合わせてくれるんじゃないかと、淡い期待をし
なかつたと言えば嘘になる。

覚悟を決めて父の方へと振り向こうとしたその時、私の目の前にバサリと大きな薔薇の花束が差
し出された。

まさか、ギル！

私が驚きに目を見張っていると、ギルフォードが真摯な眼差しを父に向ける。

「ロード・フォード、ご挨拶に何うのが遅くなりました。どうか、ルイズ嬢には俺の——いいえ、
私の妻になっていただきたいと思っています」

そしてそのまま流れるような仕草で私の手を取り、指先を絡めるようにして引き寄せた。

もう片方の手で私の頬にかかったブラウンの髪を優しく耳にかけ、愛おしそうに指先で髪をなぞ
り、こう続けた。

「ずっと手紙のやりとりばかりで寂しかった、ルイズ……愛している」

甘く囁いたかと思うと、彼がチュッと私の頬に口づけを落とした。

「っ……っ……！」

羞恥で頬が瞬く間に赤らんでいく。

や、やりすぎよ！ ほっぺとはいえ、お父様の前でキスしろなんて、誰も言ってないわよ！

案の定、そばにいる父の背後から冷気が漂ってくるのが分かった。

「きゃっ」

しかし、ギルフォードはそんな父の様子などお構いなしだった。

驚く間もなく、彼の長い腕が私の腰に回り、強引に引き寄せられた。逞しくて硬い胸板に胸が密着する格好になり、心臓がドキドキと落ち着かなくなった。

そんな私の狼狽ぶりを知ってか知らずか、彼は逃がさないと言わんばかりに耳元へ顔を寄せて、こう囁いてきたのだ。

「もちろん礼は身体で払ってくれるんだろうな、ルイズ？ 久しぶりに俺を愉たのませてくれよ」
蠱惑的な声を聞くと、ぞくぞくとした感覚が全身を襲ってくる。

見上げると、唇同士が触れそうなほどに近く。

底意地の悪そうな笑みを浮かべた美青年の顔があった。

身体!? 一番ダメな相手に婚約者役を頼んでしまったかも？

かくして——ギルフォードと私の嘘の婚約関係が始まったのだった。

第一章 婚約者のふり

結局あの後、呆然と立ち尽くす父に対して、弁の立つギルフォードがでっぴあげの交際歴を語ってくれた。

迎えに来た母が悲しみに暮れる父をなだめてくれたおかげで、なんとかその場は収拾がついた。

ギルフォードはひとまず実家に帰り、私は興奮してなかなか眠りにつけない夜を過ごしたのだった。

そうして、迎えた翌日。今日は日曜日のため仕事は休みだ。

カーテンの間から差し込む日差しが瞼を閉じていても瞳を刺激してくる。

朝だ……。ゆっくりと目を開くと、人影が見える。ベッドの端に誰かが座り、私の頭を撫でているのが分かった。優しくて穏やかな手つきに、再び眠りに誘われそうになる。

お母様かしら？ それにしては手が大きいような気がする。もしかして、お父様？

日曜日はつい朝寝坊をしてしまうので、母が朝食の時間に私のことを起こしに来てくれることがあるのだ。

寝ぼけまなこをこすりながら、身体を起こそうとした、その時。

「お前の寝顔が見られるなんて貴重だな」

私の耳に届いたのは、色香を孕んだ低い声だった。

「……っ……ギルッ！」

ベッドサイドに腰かけていたのは、ギルフォードだった。

細く差し込む日差しが、彼の麗しい金髪をキラキラと輝かせる。琥珀色のスーツの下には、上質な白いブラウス、えんじ色のベストと真紅のタイが覗く。

不遜な態度で脚を組む彼の姿は、まるで絵画から抜け出てきたかのようだった。

私は慌てて上半身を起こし、寝癖のついた髪を指で整える。

さつき私の髪を撫でていたのも彼だったのだろうか？

気恥ずかしさで頬が熱くなり、思わず視線を逸らした。

「どうして、私の部屋にいるの？」

「お前のおふくろさんが通してくれたんだよ。『昔はルイズがギル君のことを起こしに行つたのにね、早起きになつたのね』って嬉しそうだった」

「お母様が!? そ、そんな……」

母に悪気はないのは分かっているが、寝起きの姿をギルフォードに見られるのはたまらなく恥ずかしい。羞恥に耐えながらタオルケットの端をギュッと握りしめると、ギルフォードがこちらを見て不敵に笑った。

私の手に、彼の掌がそっと重ねられる。きつく握りしめていた指を一本ずつ解かれ、そのまま

指先を絡められた。

まるで恋人同士のような繋ぎ方に、心臓が跳ね上がる。

「ギル……」

「どうした？ せっかく恋人同士だつていう設定なんだ。目覚めのキスでも交わしてやろうか？」

「なっ！」

元々軽口を叩くところはあったが、こんなに軽々しく口づけの話をするような人ではなかったはずなのに。

「冗談だよ」と彼がくすりと笑った。

押搦られていたと知ると、今度は別の意味で恥ずかしくなってくる。それと同時に、皆の前で振られた出来事が頭をよぎり、胸が締めつけられた。

こんな時にあの日のことを思い出さなくても良いのに……

翡翠の瞳を揺らす私に気づいたのか、ギルフォードが顔を近づけてくる。

「ルイズ？ どうした？」

彼の表情はどこか憂いを帯びているようだった。

「……なんでもないわ」

「そうか、それなら良いんだ」

安堵したようなギルフォードの姿を見て、私の胸はギュッと痛んだ。

ギルは私のことなんて好きじゃないわ。そんなことは分かっているはずなのに、彼が心配そうに

見つめてくるたびに、淡い期待を抱いてしまう自分がいた。

何年経っても私はまだギルのことが——自分の本当の気持ちに気づきそうだったが、気づいたらいけない気がして、これ以上考えるのはやめようと、私は思考するのを中止した。

「さて、ルイズ、この屋敷だと誰が話を聞いているのか分からない。俺の屋敷に向かうぞ」
「ギルのお屋敷に？」

「ああ。まだお前の事情を聞けないからな」

「確かに、お父様がまた訪ねてきたら色々説明する時間がなくなっちゃうわね。分かったわ」
すると、ギルフォードが破顔した。

「そうか、それなら良かった。さて、刺激が過ぎるんで、俺は外に出るぞ」

彼は掌をヒラヒラさせながら部屋の外へと出て行った。

「刺激が過ぎる……？」

ギルフォードの言葉の意味が分からない。

彼が部屋を出た後、着替えようとして自分の格好を見て私は凍りついた。

「あ、胸元、はだけてる……！」

ギルフォードが部屋を出てからしばらくベッドの上にうずくまり、着替えが難航したのだった。

その後、父からどこに行くのかと引き止められたがギルフォードが説得してくれたおかげで、現在、私と彼は馬車の中で二人きりの時間を過ごしていた。

「それで？ 事情を説明してもらおうか？ ルイズ」

長い脚を組んで窓に寄りかかる姿は、舞台俳優もかくやといった様子だ。

相変わらず綺麗な顔立ちをしているわね……

久しぶりに陽の下で見る幼馴染の精悍な横顔に、私はついつい見惚れてしまった。

でも、振られた相手だと自分に言い聞かせ、私はようやく重い口を開いた。

「……私、結婚適齢期を過ぎたけれど、まだ結婚してないのよ」

「そんなことは知っている。そうじゃないと俺に恋人役なんて頼んでこないだろう」

即答されて、私はグツと言葉に詰まった。深呼吸をして気を取り直す。

「それで、お父様の親戚たちから、次々に縁談を持ちかけられるようになってしまったの」

「まあ、そりゃあそうだろう、俺も似たようなもんだからな」

ギルフォードにも見合い話が来ていたのかと思うと、少しだけ胸がモヤモヤしてしまう。

「そういえば、ギルはまだ結婚していなかったのね」

「……まあな」

ふと彼が視線を逸らした。

「まあ、俺の話はどうでもいい。ルイズ、続きを話せ」

「ええ、分かったわ。親戚が職場にまで来るようになってしまって、ちょっと嫌になっちゃっ

て……それで……」

すると、こちらを振り向いた彼の唇がニヤリと弧を描いた。

「お前のことだから、菓子職人のままでいたかった。恋人がいると嘘を吐いたら、じゃあその男を連れて来いって親父さんに迫られた、つとどこか。ルイーズの親父さんは過保護極まりないせいで、家族のことになると周りが見えなくなるところがあるからな」

さすがは昔馴染、父の性格まで熟知している。

「ちゃんと親父さんに正直に話せば良かったただけだろうが……まあ、意地っ張りなルイーズの性格じゃ無理だったか」

彼がサファイアブルーの瞳を眇めた。

……呆れられただろうか？

けれども、このまま引き下がるわけにはいかないのだ。

「お願い、ギル。しばらくお芝居に付き合っしてほしいの。世間の常識がどうであれ、私はお母様のようにずっと好きな仕事を続けていきたい。でも、これ以上両親に負担もかけたくないの」

「それで？」

「だから、恋人同士だっていう一時しのぎの演技をしてくれたら……しばらくしたら、仲違いして別れたことにするから、だから……」

だんだん自信がなくなつて、声が小さくなる。

菓子職人を志して実現させた令嬢は珍しく、そんな女を娶りたがる男性はめつたにいない。かつ

てギルが予言した通りの人生を歩んでいるようで、虚しさが胸をかすめる。

もし、彼が帰国する前に誰か別の相手を見つけられていたら……

だけど、私の心を占めていたのは、生まれてからずっと目の前の彼だけだったのだ。

数年前、私は彼に振られたことが悔しくて、つい暴言を吐いてしまった。

だけど、彼はそんな私の言葉に踊らされることなく、自分自身の力で財を成したのだ。

成功している彼が、やけに眩しく感じた。

以前に比べて精悍になった彼の横顔を見ると、ズキズキと胸が疼く。

「ルイーズ、顔を上げろ」

「え？」

気づいたら俯うつむいてしまっていたようだ。顔を上げると、ギルフォードは真摯な眼差しで私に告げた。

「面白そうだし、協力してやってもいい」

「ありがとう、ギル……」

彼の言葉を聞いて、ほっと安堵する。ギルフォードが肩をすくめながら、こちらに掌を向けてくる。

「だが、条件がある。昨日俺が伝えた通り、身体で払ってもらうぞ」

その言葉に心臓がドキンと跳ねる。身体って、つまりそれは……

ちようどその時、車体が大きく揺れた。

「きゃっ……！」

気づけば、私は座席の上でギルフォードに押し倒される格好になっていた。馬車は再び何事もなかったかのように走行を続ける。

彼の端正な顔が間近にある。どちらか一方が顔を動かせば、唇同士が触れそうなほどの至近距離で、そのまましばらく二人で見つめ合う。

「ルイズ」

ギルフォードの節くれ立った指が、私のブラウンの髪を梳いてくる。

昔はこんなことはされなかった。

大人の男性に成長した彼を意識してしまい、ますます胸の鼓動が落ち着かない。

そうして見つめ合っていると、ギルフォードがいつになく真摯な表情で告げてきた。

「本当に、ちゃんと意味を分かかって言っているのか？ お前は俺に婚約破棄か婚約解消された不名誉を負うことになるんだぞ。世間では傷物扱いされて、他の男と結婚できなくなる」

「そんなの分かっているに決まってるでしょう？」

「本当か？」

「……本当よ」

「そうか、だったら……」

ぐいっと腰を引き寄せられたかと思うと抱きしめられ、私の首筋に彼が顔を埋める。

「んっ……！」

彼の柔らかい唇が、チュツチュツと音を立てながら肌を這ってきた。

少し覚悟はしていた。だけど、ここは馬車の中だ。

あまりに性急な行為に私は動揺していた。

「……ギル、こんなところで、何するの……」

「何って、条件通りの行動をしているだけだ」

「条件……！ んんっ……」

突然、彼に唇を塞がれる。触れるような口づけは、実は初めてではない。一度唇が離れると、熱い吐息と共に告げられた。

「ルイズ……ほら、口を開け」

「ギル、やあっ……」

彼の舌に唇をこじ開けられ、ぬるりと舌が絡んできた。口中を犯されていると、どんどん口づけが深くなっていく。何度も舌が絡み合い、クチュクチュと音が聞こえてくる。

「ちよっと、やめっ……待って……ここは……」

「黙ってないと、舌、噛むぞ」

「んんっ……」

なんとか唇が離れた際に抗議するが、再び唇を塞がれてしまった。

子どもの時とは違って、かなり力が強くなっている。

抗うことのできない腕の力に、私は彼の硬い胸をドンドンと叩いて抗議した。だけど、その身体

を引き離すことなど到底できそうになかった。

「は……」

彼は口づけながら、器用な手つきでドレスの紐を解く。胸元が露出して、私は思わず羞恥の声を上げる。

「やっ……!」

「ほら、ちゃんと恋人同士に見えるように演技しないとな」

彼の長い指に鎖骨をなぞられると、全身にぞくぞくと未知の快楽が駆け抜けた。

「……あっ……」

「ルイズ、まだだ、まだ足りない」

「んうっ……」

三度唇を塞がれた後、何度も何度も口づけの角度を変えられた。

キスをしているだけだというのに、甘美な疼きと未知の恐怖が同時に襲ってくる。

彼の大きな手がドレスの中に侵入してきた。太ももを大きく撫でられると、全身がビクビクと跳ね上がる。

……頭がおかしくなりそうだ。全身が火照り切って女性の芯が蕩けるようで、まるで自分の身体ではなくなったかのようにだ。

私、このまま、馬車の中でギルと……？ そう思った時、ふっと彼の手が離れた。

「ほら、やっぱり分かってねえな」

唇が離れたかと思うと、ギルフォードが髪をかき上げながら溜息をついた。座席がギシリと軋み、彼の身体が私から離れる。

空気が肺に取り込まれると同時に、頭の芯が少しだけ冷える。

「……ちゃんと、分かって……」

泣くつもりはなかったのに、ポロポロと涙が零れてしまった。

もう一度だけ嘆息したギルフォードが、諭すように告げてくる。

「俺は世間では女性関係の評判は良くない。一度でも婚約関係になったら、俺たちの間に何かあると見なされる。何度も言うが、お前は世間では傷物扱いされて、他の男と結婚できなくなるぞ？」

そのあげく、こんな扱いでも良いのか？ 今ならまだ引き返せるぞ」

「っ……!」

それだけ言い切ると、彼がそっと離れ、下半身にかかっていた重みも消えた。

「ギル……」

ギルフォードは、わざわざ忠告してくれたのだ。

彼に恋人役を頼んだら、私は傷物扱いされて、もう他の男性との縁談は望めなくなるだろう。

けれども、彼以上に愛せる男性などそもそも存在しない。それに、今の私にとっては、将来の結婚よりも、菓子職人としての人生を守ることの方が重要だった。

唇を噛みしめ、はだけた胸元を隠すように指先を強く握りしめる。

そして、彼に挑むように告げた。

「ギル、貴方が一番知っているでしょう？ 私が、菓子作りが好きで仕事にまでしたがる変わった侯爵令嬢だつてこと」

ギルフォードが再び髪をかき上げながら問いかけてくる。

「俺の他に頼める男は？」

「いないわ」

即答すると、ふつとギルフォードが微笑んだ。

「まあ、確かに昔から、そういう変わった女だよ、お前は。覚悟は決まってるみたいだな」

昔――振られた時とは違って、彼の笑みには悪意を感じなかった。

「調子も戻ったみたいで何よりだ」

「え？」

「殊勝な態度のルイーズなんて、らしくない」

まさか、嫁いぎ遅れていることを私が気にしていると思つて、励まそうとしてくれたの？

昔から偉いそうだけど、根は優しいギルフォード。

再会した彼は、どこか遠い存在になってしまったと寂しさを感じていたけれど、こうして子どもの頃と変わらない気遣いに触れると、なんだか懐かしくて、そしてたまらなく愛おしかった。

「まあ、そもそも名誉に傷がつく前に、俺がお前を……」

ギルフォードが何か呟いたようだったが、馬車の揺れが強くなって、続きは聞こえなかった。

「何か言つた？」

「いや、別に……」

彼は視線を逸らし、長い指で私の乱れた衣服を整えていく。その優しい手つきに、また胸が疼いた。

「ギルのおかげで仕事を諦めないで済みそうだよ。本当にありがとう」

少しだけ乱れた髪を直しながら、私は精一杯の感謝を口にする。

素直にお礼を言うのが気恥ずかしくて、つい視線を泳がせてしまった。

「ルイーズが俺に感謝だとか、夏なのに雪が降りそうだな」

軽口を叩かれたけれども、そんな憎まれ口も今は心地いい。私は小さく笑って受け流した。

「それに」

「それに？」

「私はずっと、好きな人とか結婚したくなかったから……」

その言葉に、ギルフォードの眉がピクリと動く。

「ずっと、好きな男？」

「あ……」

しまった。うっかり口を滑らせてしまった。私は後悔した。

そう、私はずっと……あの日大勢の前で振られてからも、私がずっと好きなのは……

穴が開きそうなほど強く見つめ返すと、彼のサファイアブルーの瞳が複雑に揺れ動いた。

「ルイーズ、俺は……」

再び馬車がガタリと揺れた。

「ああ、着いたな」

どうやら目的地に到着したようだ。

「さあ、行くぞ」

御者がそうするよりも早く、ギルフォードが扉を開け放った。

馬車を降りる直前、不遜な態度で問うてきた。

「どうせ、その好きな男には恋人役も頼めないぐらい、相手にされてこなかったんだらう？」

私は痛いところを突かれて、うっとうなった。当の本人にそんな風に言われてしまうとダメージが大きい。

「そう、だけれど……あ、貴方こそ、なんで薔薇なんか持って道を歩いていたの？」

今度はなぜかギルフォードが顔を真っ赤にした。

「俺にも事情があるんだよ！」

「どんな事情よ？」

久しぶりにギルフォードに会ったことに気を取られすぎていて、どうして薔薇を持っていたのかなんて、あまり深くは考えていなかった。

こうして二人で言い合いをしていると、まるで昔に戻ったかのようだ。

「さて、ちゃんと婚約者同士に見えるように、しばらく俺が色々教えてやるよ。さあ、これから今の続きをしてやる。行こうか？」

「続き!? それに、行くってどこに？」

「そんなの決まっているだろう？」

ギルフォードがニヤリと口の端を吊り上げた。

続きと言われると、頭の中に先ほどの光景が浮かんで動揺が走る。

「え、ギル、ちよっ、そんなっ……」

「ルイーズ、覚悟したんじゃないかったのか？」

「うっ」

凶星を突かれて、言葉に詰まってしまった。

「ほら、早くしろ。ああ、もう仕方がねえな」

「きやっ」

ドレスは相当な重量があるはずなのに、ギルフォードは私のことを軽々と持ち上げた。

彼の逞しさを感じて、心臓がドクンと大きく跳ねる。

なんだか落ち着かなくて視線を彷徨さまよわせていたら、ギルフォードがニヤリと笑った。

「どうした？」

「え……その……昔に比べたら、もつと力が強くなったんだなって思ってた……」

「そんなことか」

たいしたことではないといった調子の反応で、少しだけ胸が痛んだ。

「ルイーズ、お前の重さは変わらないな。いいや、菓子の食べすぎで少しだけ重くなったか」

「なっ……！ 女性に体重の話をするのは失礼よ！」

「ははっ、冗談だよ。お前は昔から羽根みたいに軽いよ」

蕩けるような笑顔を向けられると、なんだか恥ずかしくてそれ以上何も言えなくなってしまった。ギルフォードに抱きかかえられたまま馬車から降りた後、ゆっくりと地面に下ろされる。

「さあ、行くぞ、さっさと続きだ」

本題を思い出して、はたと気づく。

「待って、ギル、なんで貴方はいつもそんなにせっかちなのです!?、心の準備が——って、ここどこ!？」

てっきりギルフォードの実家の屋敷に連れて来られると思っていたのに、到着したのは見知らぬ場所だった。

眼前に広がっていたのは手入れの行き届いた広大な緑の土地だった。

何かの観光施設かしら……？

垣根を越えて屋敷に近づくと、甘やかな香りが鼻腔をくすぐった。

色とりどりの花々が愛らしく咲き誇る花壇を抜けると、緩やかなアーチを描く橋の向こうには職人の手によって美しく整えられた庭園が続いている。

そしてその奥に鎮座していたのは、石造りの美しい豪華な白い屋敷だった。庭もすごかったのに、屋敷の外観も豪華すぎる。

古代神殿を模したと思われる壮麗な柱が並ぶその姿は、私の屋敷ともギルフォードの実家とも違う。

侯爵家である私や伯爵家であるギルの実家の屋敷よりも大きくて立派なここはいったいどこなのだろう。圧倒されて視線を彷徨わせていると、隣でギルフォードがふふんと鼻を鳴らし、誇らしげに胸を反らせて言った。

「この屋敷は俺のものだ」

「ギルの?」

「そうだ。俺の新居というか、別荘みたいなものだ。帰国前に建築を依頼していたんだ。もちろん、自分の金でな」

「そうなの」

やけに「自分の金」という部分を強調してくる。

私が呆然としたまま建物を見上げていると、彼はさらに言葉を重ねた。

「ちゃんと自分の金で建てたんだ」

「ええ、そうみたいね」

二回目だ。どう反応していいか分からず曖昧に頷くと、彼はダメ押しとばかりに言い直してきた。

「この俺が、自分で稼いだ金だけで建てたんだ」

……自分の金って三回も言ったわ、この人。

私は建物から、自信満々なギルフォードへと視線を移す。

「すごい……わね？」

「そうだろう!? ルーズもそう思うか!」

「ええ」

そう答えると、彼は少年時代の頃のようにサファイアブルーの瞳を細めて、いかにも嬉しそうに笑った。

実際、一代でこれほどの屋敷を構えることができる人間など、わが国でも数えるほどだろう。しかし、悦に浸っているギルフォードを横目にふと余計な考えが頭をよぎる。

一人で住むのなら、こんなに広い場所はいらないはず。だとすれば、まさか、女性を侍らせるために建てたんじゃ……!?

派手な女性関係の噂を思い出し、胸がざわついた。けれど、すぐに頭を振ってその考えを追い出す。仮にもそうだったとしても、彼の自由だ。私には関係ないわ。私はあくまで婚約者のふりを頼みただけの立場なのだから。

上機嫌で歩き出した彼の後ろをついて、玄関に向かう。

あまりに広大な庭に、どこまで広がっているのだろうか、ついまたあちこち視線を飛ばしてしまつた。私のその姿に痺れを切らしたかのように彼が声をかけてくる。

「ほら、キョロキョロするなよ。仕事の時以外、とろいのは変わらないみたいだな。まったく」

「仕方ないでしょう! 私は貴方みたいに、せっかちなじゃないの……って、きやあつ!」

またもや突然横抱きにされてしまった。お姫様のようにうやうやしく抱えられると、どうしても

身体が相手に密着するので、心臓がバクバクと跳ね上がってしまう。

「ほら、行くぞ。まったく、体力はつけておけよ」

「すぐにどこかに飛び回る体力馬鹿とは違うのよ! 私は体力を温存しているの!」

「体力馬鹿とはなんだ!? 確かにお前の方が賢いところもあつたが、俺だつて決して馬鹿じゃなかつたぞ!」

「体力馬鹿とただの馬鹿は別ものよ! そもそも馬鹿は、自分のことを馬鹿じゃないって言い張るものなのよ!」

「なんだと!」

ぎゃあぎゃあと言い争いながら、私たちは屋敷の中へと向かう。

凝った装飾が施された弓形のアーチをくぐり、重厚な玄関扉を開けて、エントランスへと足を踏み入れた。吹き抜けのホール天井には豪華なシャンデリアが吊り下がっており、中央にあるらせん状の階段が二階へと続く。

内装も選び抜かれた調度品で整えられており、正面には巨大な風景画が、左右には磨き抜かれた銀の甲冑が並べられていた。

その全てが、ただ高価なだけではなく極めて良質な品で統一されており、彼の美意識の高さが窺える。

ふかふかの絨毯を踏みしめて階段を上り、奥にある一室へと連れて行かれる。扉の上部には美しい薔薇が描かれた二枚のステンドグラスがはめ込まれていた。

「ほら、着いたぞ」

私を抱きかかえたまま、ギルフォードが器用に真鍮でできた金色のドアノブを回す。いったいどんな場所かと思えば、部屋に足を踏み入れた途端、私は目を疑った。壁は淡い桃色に彩られ、愛らしい花やりボンの絵柄が随所に施されていた。

どうも女性の部屋に見える。……というよりも、屋敷の私の部屋に驚くほど雰囲気似ている。

えっ、何これ。偶然？ それとも……？

あまりの既視感に困惑したが、そのことを考える余裕はすぐに失われた。

先ほどまで子どものように言い争っていたはずなのに、部屋の中央にある大きなベッドを目にした途端、甘く重い緊張感に襲われた。

左右に薄絹が垂れた、ロマンチックな天蓋付きのベッド。壊れ物を扱うような手つきで清潔なシーツの上に横たえられると、心臓が耳元でうるさいほどに音を立てはじめる。

私の目の前で、彼がスーツを脱ぎ捨てて。真紅のタイを解き、白いシャツのボタンを緩めていく。露わになった骨ばった鎖骨と硬い胸板に思わず息を呑む。

ベッドがざしりと軋み、スプリングを弾ませてギルフォードが乗り上げてくる。

そして横たわった私の上に覆いかぶさってくるが、彼の身体の重みに気持ちが落ち着かない。私の髪を、彼の長い指が優しく梳いた。

「わりと綺麗に成長しているし、恋人役の報酬としては悪くないな」

不敵な笑みは昔と変わらないが、その慣れた手つきに少しだけ胸が痛んだ。

「なあ、ルイーズ、どうせ初めてだろう？」

凶星を指されたため、ふいっと顔を逸らす。

「当たり前でしょう。一応、貴族の令嬢なんだから。分かっているくせに聞いてこないで」「そうか」

ギルフォードは、サファイアブルーの瞳を細めながら、くつくつと笑っている。

なぜそこで嬉しそうなのよ！、と私は少しだけムツとした。

「当然、好きな男ともまだなんだな？」

「あるわけないでしょう。馬車で言った通りよ！ そもそも振られたんだし、いちいち確認してこないでちょうだい。貴方も、どうせ誰にも相手にされなかったんだらうって言っていたじゃない」

ギルフォードの雰囲気が一気に険しくなった。

「振られた？」

うっかり口を滑らせたことを後悔した。

まずい、振られた当人である彼にだけは、未だに引きずっていることは知られたくないのに……

ギルフォードは眉をひそめて、明らかに不機嫌そうに口をへの字に曲げている。

なぜ彼が怒っているのか分からないが、あまりにも雰囲気が変わったため、なんとなく気まずくなつて彼から視線を逸らす。

「そ、そうよ、ずっと好きだった相手には、私の方が振られたの！」

思わず声が上がってしまった。

ちらりと見上げると、なぜか自分を振った張本人であるギルフォードが、愕然とした表情を浮かべている。

「そんなの貴方が一番知って——」

そう言いかけた私の唇に影が差す。彼の顔が吐息が触れる距離まで迫っていた。

「その振った男のことを忘れさせてやるよ」

「え？」

振った張本人に忘れさせると言われて困惑していると、ドレスの裾をたくし上げて彼の手が滑り込んできた。

「きゃっ……！」

太ももを撫でる大きな手の熱に、ゾクゾクと快感が背筋を駆けていき、思わず両脚をよじらせてしまう。馬車の時よりも性急なはじまりに困惑しつつも頭がクラクラとした。

「……んっ……」

ギルフォードの顔が胸元に近づくと、吐息がかかってくすぐりたい。そう思っていたら、彼が器用に口元で胸元のリボンを解いた。

「ギル、待って……」

「待たない」

ギルフォードの指がドロワーズの合わせ目に伸びる。馬車に乗っている間にすっかり濡れてしまっていたそこを指先でなぞられると、私は羞恥で視線を上げられなくなった。

「あっ」

クチュリと音が立ち、静かな部屋に淫らに響く。

「へえ、馬車を降りてしばらく経つのに。俺と今から何が起こるか、ずっと想像してたのか？」

「ち、違うんだからっ」

嘘だ。全く想像しなかったわけではない。

でも、ギル相手には正直に言いたくなかった。

「ひゃんっ……！」

そのままドレスをめくりあげられ、下着を引きずり下ろされる。露わになった下半身に彼の視線を感じて落ち着かない。

「そんなにじろじろ見るのは止めて」

「そうか、だったら、さっさと次に進もうか」

彼の指が優美な動きで花卉の間に割り入り、ぬるりと深まり動きはじめた。

「……っ……！」

馬車の時以上の行為に、恥ずかしくて仕方がない。指が花卉の奥で蠢くたびに、女性の芯が疼いて、甘い声から漏れてしまう。

「あっ……んうっ……」

「ルイーズ、声、我慢するなよ」

ギルフォードの両手が私の太ももの間を割るように侵入してくるかと思いきや、両脚を左右に開

かれた。

「……きやつ、ギル、何して……ひゃんっ……！」

くの字に曲げられた脚の間に、彼の頭が埋もれる。

「え？ やつ、何っ……ひゃあっ……」

粘膜の上を彼の厚い舌が這いはじめた。抵抗しようとして彼の頭に両手を伸ばすが、びくともしない。

「えっ……あっ……あっ……やだ、そんなとこ、やめっ……」

「やめねえよ」

ピチャピチャ、クチュクチュ……。下半身から淫らな水音が聞こえてきて、羞恥で頭がおかしくなりそうだ。舌を動かされるたびに、ギルフォードの金髪がサラサラ揺れた。

「あっ……やあっ……ああっ……あんっ……」

しばらくそのままにされていると、敏感な部分をペロリと舐められた。

身体がビクンと大きく跳ねて、両方の爪先に力が入って白いシートにしわができる。

「ひゃんっ……！！」

「もう硬いな」

「やあっ……何、ギル、やめっ……」

尖った芽を、唇で食はまれ伸ばされる。そのまま口の中で転がされると、言いようのない快感が背筋を駆けていった。

身体がおかしくなりそうな恐怖と、未知の快感が同時に襲ってくる。

「あっ……ああっ、あつ、ギルっ、何か来ちゃうっ。あつ、もう……！！」

彼の舌による愛撫が激しくなった瞬間、目の前が真っ白になる。

「ああっ——！！」

電流のような快感が全身を駆け巡ったかと思えば、身体がビクビクと跳ね上がる。

「は……あう……あ……」

下の口がヒクヒクと蠢くのが分かった。愛液が溢れ出し、脚の間を零れ落ちていく。

「俺から離れられなくなるぐらい、激しくしてやるよ」

「ふえっ……は……」

蕩けるような熱の中にいた私の耳に、冷酷なまでに甘い声が届いたかと思うと、両脚の間からギルフォードの頭が離れた。顔を上げたギルフォードは、自身のベルトに手をかけ、下衣を緩めはじめた。

「あ……」

取り出された巨塊を見て、私は目を白黒させた。

幼少期に一緒に入浴した時の記憶とは比較にならないほど、それは猛々しく巨大化だった。先端から溢れる透明な雫が、いよいよこれから始まるのだと現実を突きつけてくる。

動揺している間に、先端を狭穴にグチュリとあてがわれた。

「ルイズ、覚悟は良いか？」

改めて問われると、どうしようもなく鼓動が速くなる。心臓が口から飛び出してきそうだ。数年経っても、ギルのことを忘れられなかった。他の男性とこんなことをするつもりはこれからもない。育ててくれた両親への申し訳なきはあつたものの、私の覚悟はもう決まっていた。

「ただ、その前に彼に伝えておきたいことがある。キユツと唇を引き結び、ギルフォードを見据えた。」

「あの……」

「なんだ、怖気づいたのか？」

「いいえ、覚悟はもう決まっているわ」

深呼吸をすると、彼に自分の意思を告げる。

「婚約解消した後、貴方から離れられなくなるのは困る……だけど、できれば……」

「なんだ？」

顔がりんごのように真っ赤になっている自信がある。

決意したはずなのに、恥ずかしすぎて顔を見ることができず、結局視線を逸らしてしまった。唇に手を添えながら、喉をゴクリと鳴らした後、からからになった口をゆっくりと開く。

「……できれば、最初だから、お手柔らかに頼みたいの」

「は——」

ギルフォードの動きが止まった。

「だ、だいたいキスだって、今日の馬車の中でのが、大人になってから初めてだったのに……あんな、激しいの……」

「いよいよ恥ずかしくて、耐えるように目をギユツと閉じた。」

「キスも……大人になってから初めて？」

女性慣れた様子のギルフォードに伝えるのは勇気がいった。

「子どもの頃に、貴方としたのは数えていないわ」

身体の上に乗っていたギルフォードの身体がこわばったのが分かった。

「ルイーズ、お前、庶民に交じって働いていたんだらう？ キスぐらいは経験あると思っていたんだが……ああ、いや、確かに相手にされなかったと言っていたか」

ギルフォードはぶつぶつ言いはじめる。

「庶民という言い方は失礼だわ。一般市民でも貞淑な女性が多いし、貴族の女性でも奔放な人は多いのだから。全員を一緒に考えるのはよくないわよ」

「……しくじったな」

ギルフォードがポツリと呟いたかと思うと、自身の髪をサラリとかき上げ、くしゃくしゃにしはじめた。そうして、すつと離れた。

「どうしたの？」

寝そべった私の隣に座り込んだギルフォードは、いそいそと下衣を穿きはじめた。

「俺は……キスも初めてのような女に無理強いするほど、相手に困っちゃいない」

「え……」

ギルフォードは、私にキスぐらいは経験があると思ひ込んでいたのだろうか。衣服をまた着用していく彼を見る。

いよいよ愛想を尽かされ、機嫌を損ねてしまったのだろうか。面倒な女だと思われてしまったのかも知れない。そう思うと、どうしようもなく焦りが生じる。

「ギル、待って！ その、貴方に比べたら、たいしたお金も持っていないし……お金持ちの貴方にあげられる価値のあるものなんて、もう、この身体ぐらいしかなくて……」

ギルフォードがピクリと反応したことに、この時の私は気づいていなかった。
「貴方もちょうど、身体で払って言ったし、だったらって……」

しどろもどろに言い訳する私を見下ろし、着衣を全て整えたギルフォードが私に向かって告げる。
「ルイズ、ドレスを整えろ」

「え？」
「行くぞ」

ドレスの乱れを直した後、連れ出されて到着したのは屋敷の中にある衣裳室だった。

使用人たち数人に促されて中へ入ると、仕立て屋もかくやと言わんばかりのワードローブに目を見張った。

「どうしたの、ギルったら」

「顔合わせ用のドレスを選ぶんだよ」

「顔合わせ？」

「お前のところと俺のところの両親とのだよ」

「え？」

「ほら、好きなドレスを選べ」

そういうことかと思ひはしたが、顔合わせ用のドレスを選ぶなんて、あまりにも急な展開に困惑してしまふ。

気づけば、なぜか途中まで一緒にいた使用人の姿は見えなくなっていた。

試着室のような場所に数枚のドレスを抱えて入ると、大きな鏡に映る私は先ほどまでの行為のせいで、まだ頬が火照っている。使用人たちにおかしいと思われなかったかしら……

今しがたまで身に着けていたドレスを脱ぐと、パサリと床に落とした。

勧められたスレンダーな青いドレスに着替えたと同時にカーテンがサツと開かれて、ギルフォードが姿を現した。

「ルイズ、着替えたか？ どうせだから、脱がせやすいのしておけよ」

「ちよっと、勝手に開けないで！」

羞恥で顔が赤らんだ。

「お前も知つての通り、俺は気が短いんだよ。ああ、馬子にも衣装とはこのことだな。……ん？」

ギルフォードの視線が私の胸元に向かった。

「その胸元は開きすぎだ。後で調整させよう。あと、さっきまで着ていたドレスは地味すぎる。どうせお前のことだから、せっかくお袋さんが明るい色のドレスを選んで着ないだろうか」

「またもや凶星で、グッと言葉に詰まる。」

「……ドレス代、ちゃんと払うから」

「いらぬ。そもそも、ここに準備してあるドレスや装飾品の類は、全部お前の——」

「私の……何なの？」

「そう疑問を抱いているとギルフォードが口ごもり、代わりにある一着を差し出してきた。」

「それは、私が職場で着ているものと同じデザイナーの、新調されたメイド服だった。」

「私が店で見ている制服が古くなってきてるって、なんでギルが知っているの？ 確かにオーナー」

「マダム・モリスンは、貴方の叔母様だけだ」

「まあ、細かいことは気にするな」

「細かいことなのかどうかは分からなかったが、ひとまずは気にしないことにした。」

「そうして、メイド服を抱えたままおらずおらずと彼を見上げる。」

「ありがとう」

「やれやれといった調子でギルフォードが続ける。」

「ルイズ、今度はちゃんと受け取ってくれたな」

「え？」

「今度は？ ああ、あのバレンタインのことを言っているのだろう。」

「ギルフォードの顔を見ると、心底嬉しそうな満ち足りた笑みを浮かべていた。」

「そんな彼の様子を見ると、心臓がトクンと音を立てる。」

「ギルフォードが穏やかな笑顔を見せた。」

「お前はな、着飾りさえすれば綺麗なんだよ」

「そう言っ、彼の大きな手が私の左手を掴む。」

「指先に触られる感覚に立ち尽くしていると、彼はそっと手を離れた。そこには、大粒のエメラルドが輝く指輪がはめられていた。」

「これは……」

「俺に婚約者役を頼むなら、自分には身体しか価値がないなんて、二度と卑屈な態度は取るな」

「ギルフォードがまた私の左手を取る。柔らかな唇が指にチュツと触れてきた。」

「身体を報酬にした俺も悪かったが、他の奴が何と言おうと、お前の魅力は、小さい頃からずつと……俺だけは知っているから」

「ギル……」

「サファイアブルーの瞳と私の視線が絡み合う。」

「この言葉はきつと嘘じゃない。いつになく真摯な彼の表情と言葉が、じんと胸に響く。」

「だけど、じゃあ、なんであの時、わざわざ皆の前で振るような意地悪をしたの？」

「昔のことを思い出して、再び胸が痛くなる。」

「演技だと分かっているのに。いつか終わる関係だと知っているのに。」

「それなのに、本当の婚約者だつてい錯覚してしまいそうなほど、彼への想いに深く溺れていくのを感じていた。」

そんなのダメなのに。
——離れた時、寂しくなって、傷つくのは私だって分かっているのに。
かつての想いが溢れるのを止められなかった。

第二章 真の婚約者

翌日。父がごねたため、急遽、両家の顔合わせを行うことになった。

父親同士、仲が良かったはずなのに……お父様の空気が冷やかだったわ。

父は表面上は穏やかだった。だが、「娘を幸せにしてくれるのか？」と牽制をかけた時の圧力が凄まじかった。

一方、ギルフォードのお父様は、普段通り柔和な笑みを浮かべてやり過ごしてくれていた。

ちなみに婚約者役のギルは、普段の無然とした態度ではなく、かなり社交的な雰囲気を一貫して醸し出していた。

「ルイズ、必ず幸せにするよ」

「え、ええ、ありがとう」

婚約者のふりをした私たちのやりとりを見て、お互いの母親たちは楽しそうにキヤツキヤツと話し込んでいる。

私はといえば、嘘を吐いている罪悪感から胃がキリキリと痛み、皆に見えない位置で終始お腹をさすっていた。すると、突然、ギルフォードに身体を抱きかかえられた。

「きゃっ」